四季録

字を書く

真新しい令和に慣れないまま、平成になった日のことを思い出す。

その頃、夜になると決まって座卓の上で墨を磨り、思いつくままに字を書いていた。筆を手にしながらテレビニュースをつけると、「平成」としたためた墨書がズイッと差し出された。そこで僕は、半紙に平成、平成と何枚も書いた。だからよく覚えているのだ。

当時、書の世界が気になっていて、自分なりに何か摑みたいと、王義之や顔真卿を取っ掛かりに、過去の名筆とされるものを見ては感心したり首をかしげたり。本阿弥光悦展は大阪まで出向いたが、予想通り、見惚れてしまった。普段、書の現物に触れる機会はほぼなく、本などで目にするしかなかったが、日頃から筆を持つ書家や坊さんがいい字を書くとは限らず、政治家や絵かきにも秀でた書き手がいるのも少しは知った。

僕はと言えば、毎夜書きながら「ソー、下手だなあ」とため息をつきながら「いや、下手なんてよぎるすけべ心からしてすでにダメだ！」と葛藤するばかり。思いだけは高いのだが、どこかも、はったりめいて鼻白む。絵の世界も例外ではないが、絵画道なんて言い方がないのはいいな。

字は人を表すと言うが、たしかにそう感じるところはある。たっぷりとした字、痩せた字、格調高い字、貧相な字、衒いのない字、威張った字、清らかな字、生臭い字、品のいい字、ぎすぎすした字、楚々とした字、ぶりっ子な字、おっちょこちょいな字。ああ挙げたらキリがない。それにバレまいと自分を隠して、わざとな字を書く人もいる。

いずれにしても思うのは、上手でつまらない字、下手でも魅力的な字があるということ。これは絵も同じ。いやがおうにもその人から滲み出てしまう、ごまかしのきかない表現なのだろう。

墨書はさて置き、僕自身は字の形を絵と同じ感覚で捉えるようになって久しく、もっぱらペンだが自由度が増した。考えてみると、元々文字の起源は絵文字であり、象形文字なのだ。文字が誕生して以来何千年もの間、人は手を使って書いたり刻んだりし続けてきた。そして今、人を映す手書きの字は衰退の一途をたどっている。

ボブ・ディランは歌う。「…いつまでもあなたの手が動きますように…」。人はまたひとつ、手を動かすのをやめるのだろうか。

（吉田　淳治・画家）

囚われた字になってしまう。臨書もせず全くの自己流で書き続け、わずか1年間ほどだったが、何も摑めないまま遠のいてしまった。

日本では書道はもとより、茶道、華道とやたら「道」が付くが、どうも胡散臭で僕は苦手。近年のコマーシャリズムに乗っかった書道家たちのパフォーマンス

愛媛新聞 :朝刊 2020/01/19 面名:文化 ページ:028

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。